

# イフンケ 母サキのイフンケに守られて

## [心の子守歌]を次の世代に伝えたい

8月30日(水)19:00~20:30 東京会場

講師 弓野 恵子 アイヌ文化活動アドバイザー

イカターイ クアニ アナッネ 弓野恵子 レ ネ。  
千葉県大網白里コタン タ クエッ ネ。  
タント アナッネ ボロンノ ウェカルパ ワ  
イヤイヤケレ。

皆様こんばんは。ただ今紹介にあずかりました弓野恵子と申します。千葉県の大網白里町から今日は来ました。「イカターイ」というのは浦河方面の挨拶言葉です。今ではよく「イランカラプテ」という言葉が挨拶の言葉として使われていますが、ちょっと軽く手を添えて「イカターイ」「お元気でしたか?」というふうに浦河ではあいさつをします。

今日は、「イフンケ」というテーマでお話しをさせていただくことになりましたけれど、こういうところでお話しをするのは初めてなので、すごく緊張しています。ドジったりして聞きづらいことがあるかも知れませんが、話し下手に聞き上手ということでお願いします。

私は、1948年に浦河町の姉茶というところで生まれました。昔、姉茶はアネサラと言われていたそうです。アイヌ語でアネサラというのは、葎がたくさん生えているところという意味です。近くに元浦川という川が流れていますので、昔は川のほとりに葎がいっぱい生えていたのだと思います。私が生まれた頃、姉茶には70軒くらいの家があって、そのうち3分の1くらいはアイヌの家でした。和人の方が大きな農家をやっていて、私が物心ついた頃には、大きな牧場が周りにいっぱいありました。

それでは私の育った環境についてお話しさせていただきますと思いますが、まず、父のことからお話しします。父は和人の子供だったのですが、5歳の時にアイヌの家に預けられて育ったそうです。昔は、本州から来た和人が食料難などで生活が困窮して子供を育てられなくなると、アイヌの家に子供を預けたそうです。もともと北海道に住んでいて、北海道で生きるすべを心得ていたアイヌは何人でも子供を育てることができたのです。父もそうした事情だったのだと思いますが、静内の丹野ウメさんという方のところへ預けられたそうです。育ての親のウメさんは優しい人だったので、父も救われたのではないかと思います。しかし、生活は苦しかったので7歳くらいの時からあっちこちの家へ働きに行き、子守の仕事などをしていたそうです。17、8歳くらいの青年になると、山へ行って住み込みで山子という木を切る仕事をしたそうです。そうして稼いだお金は育ての親のウメさんのところへ送っていたそうです。ウメさんもまた、

父が働きに出ている間、いつも陰膳を据えて父の無事を祈っていたそうです。

次は母、遠山サキのことになります。母もまた、5歳の時に実の母親が病気で亡くなっています。そのため、母親の姉、私の母にとってはおばのサトに引き取られ、厳しくしつけられて育ったそうです。

母は数え8歳の時に家の近くの姉茶土人学校に入ったそうです。土人学校と言うのは、アイヌの子ども20人くらいが通う学校で、そこで読み書きを習ったそうです。この学校に通っていた時、1日に1回は牛乳を貰って飲んでいたので、それが何よりおいしかったと言っていました。聞くところによるとこの牛乳の配給があったのは土人学校だけのようです。この頃は、学校から家に帰ると、「おっかちゃん」と呼んでいた育ての母からいろいろ用を言いつけられるし、本当の親ではないということで甘えることもできなくて、つらいこともあったけれど学校へ行っている時は楽しかったと言っていました。

ところが、小学校3年生になった時に姉茶土人学校が廃校になって、5キロくらい離れた野深尋常小学校に入るようになったそうです。もともと和人の子供が通っていた小学校に、突然、アイヌの子供が入ることになったのです。そうすると「あっ、犬が来た、ア、イヌが来た、」とか、「汚いアイヌが来た」、「臭い臭い」と言われたり、つばを吐き掛けられる、石をぶつけられる、学校への道で通せんぼをされる、つかえ棒をして教室に入れてもらえないというようないじめに遭ったそうです。それでも頑張って通っていたのですが、先生も見て見ぬふりをして助けてくれない。勉強も急に和人の中に入ったので、難しく解らない。そうしていじめられるということで学校へ行かなくなったそうです。ただ、学校へ行かなければおっかちゃんに怒られるから、朝家を出て、学校へ行く途中にある橋の下で時間をつぶして、みんなが帰る頃に急いで家に帰るということをして、学校へ行ったふりをしていました。

小学校を卒業すると、子守奉公に出て住み込みで働いたそうです。そうして何軒かの家を回りながら苦勞をして育ったそうです。子守奉公が終わった15歳の時に、土人学校の跡地で安原さんという人が大きく農業を始めたので、そこへ奉公に行くことにしました。近所の人が「あそこで使われたら、殺される。」というくらい厳しいところだったのですが、母はそこで、馬の扱い方や田んぼのつくり方をというような農業の仕方を覚えることができ

たので、安原さんは大恩人だと母は言っています。1年間苦勞してわずかな給金と米を3升もらった母は、その給金と米を持っておっかちゃんに報告して、米のつくり方などを覚えたことを喜んでもらい、それから遠山家を継ぐべく農業を始めました。

母を育てた桐本安蔵、サトのことを私は、じっちゃん、ばばと呼んでいました。2人は私のことを本当の孫のようにかわいがってくれました。じっちゃんは馬喰という馬を売り買ひする仕事をしていて、ばばは少し体が弱かったのでちょこっとした畑を作っていました。そして、農業の仕方を覚えた母が田んぼづくりを始めたのです。

じっちゃんは馬喰だったので、あっちこちに行って馬の売り買ひをしてくるのですが、帰ってくる時は、骨と皮だけのようないろいろとした馬を連れて帰ってきて、「サキ、面倒見てくれよ」と言って母に馬の面倒を見せました。母とばばは馬に一生懸命おいしいもの、わらに燕麦や糠をまぜて食べさせたり、わらを束ねたブラシで毛をすいたりして面倒を見ました。馬もそれに応えて、だんだん丸々と太って見栄えもよくなり、田んぼ起こしとか畑起こしの時にも一生懸命働いてくれたそうです。そうして馴染んだかと思うと、じっちゃんはその馬をどこかへ連れて行ってしまい、いつの間にか、また違ういろいろうろした馬を連れてくるという繰り返しだったそうです。

そうこうしているうちに、世話する人がいてアイヌの家で育った和人の若い衆がいるから一緒にならないかという縁談話が持ち上がりました。その時、母はいじめられた経験もあるし和人くらい嫌なものはないと思っていたので、断りたいと思っていたそうです。だけど、「遠山の名前を絶やさないう結婚して子供をつくれ」とばばからは言われるし、ろくに顔も見ないで嫌と言うこともできないということで一緒になったそうです。そうしたら、お互い親に縁が少ない者同士、気が合ったのか次々と6人の子供が生まれました。誰一人欠けることなく、今も全員元気です。約20年前に、兄妹全員が集まって父と母の結婚40周年のお祝いをしたのですが、その2年後、父はハチに刺されあつげなくあの世へと旅立ってしまいました。

去年、その父の17回忌の法要を行ったのですが、その時、アイヌプリでイチャルパ、先祖供養もやりました。その時に撮影したビデオがありますので、皆さんに見ていただきたいと思います。この時、花団子やオハウ、いもや昆布の団子、アンカルベ、イナキビごはんというようなものを家族みんなで作って供養をしました。

(ビデオ上映)

じっちゃんが生きていたころは、しょっちゅうカムイノミやイチャルパをしていて、よく私もばばと一緒にそれを見ていました。じっちゃんが丁寧に丁寧に先祖様

や神様をお願いしていたことを記憶しています。春には、物がたくさんいただけますよというハルエカムイノミ、秋になると、たくさん物をいただきありがとうございますというパセオンカムイノミということでお祈りをしていました。

世の中にあるもの全てのものには役割があって、それぞれの神様がいて考えられていたのですが、お祈りを始める時には、まず、リクンカムイ(天の神様)、モシリカムイ(地の神様)、アペフチカムイ(火の神様)、ワッカウシカムイ(水の神様)、ルヤンベカムイ(雨の神様)、レラカムイ(風の神様)、キナカムイ(草の神様)、ニツツネカムイ(木の神様)の8つの神様にお祈りしてからカムイノミをします。じっちゃんの家にはヌサがあって、この8つの神様がいつも立てられていました。そして、何か困ったことがあったりすると、じっちゃんはヤイコイタクとって、そこへ行って、こうこうだから何とか助けてくれと話しをしていました。常に神様と向き合っているような感じでした。父の遠山長吉もアイヌの家で育ったので、そういうことを自然にやっていました。

カムイノミが終わった時には必ず、カスケケクと言って、ヨモギの木と笹の葉っぱを束ねたもので、悪い病気や流行病にかからないよということでも悪魔祓いをしました。これは「フッサ、フッサ」とまじないの言葉を言いながら、ヨモギと笹の葉の束で体をバサツ、バサツと祓うので痛くてたまらないのです。弟達はそれが始めると逃げたり、泣いたりしていました。

母からは、虫にも何にでも命があって、大切な役目を持っているのだから邪険にははいけない、すぐに殺すものではないと教えられました。そして、アペフチカムイ、火の神様は一番はじめにお祈りをする神様で、願いを届けてくれるのだから跨いではいけないと言われました。そして、ワッカウシカムイ、水の神様はこの世のものが生きるのに必要なものだから川に行っておしっこをすとか、石を投げて遊んではいけないと言われました。どうしてもしなければいけない時には、一言謝ってからしなさいと言われました。今でも、火の神様、水の神様、草の神様といろいろたくさん神様がいて、お祈りするのが大変だと思いますが、そのお陰で、私たちは生かされているのだと思っています。

私は母と同じ野深小学校へ通ったのですが、母のように石を投げられたり、いじめられるということはありませんでした。それでも、アイヌという言葉は聞くのは嫌でした。小学校6年生の時に敬老会があって、私は家のばばの手を引いていくことになったのです。ばばは、口と手にきれいな入れ墨、シヌイエをしていました。そこ頃にシヌイエをしている人はあまりいなかったのですが私は、何かとっても恥ずかしいような、「アイヌ、アイヌだ」と脇から聞こえてくるような気持ちになってしまいました。そのことがあってから、みんなからアイヌと言われていたのではないかと感じ、自分からみんなの中に溶け込ん

でいくことができず、一人で運動場の隅でいることが多くなりました。

そのようになったのは、アイヌはどうか、アイヌだからどうか、子供のころにつばを吐きかけられたというような話を母から聞かされていたことや、その辺の和人は学校に持ってくる弁当も卵焼きとかいろいろなおいしいおかずがあって、お米のご飯を持ってきていてみんな裕福に見えていて、そのころ学校にいた5、6人のアイヌの子供の弁当には、おかずがあまりないので新聞紙で隠して食べたり、中には弁当を持ってこなかったりして、そのうち、お弁当の時間になると運動場へ行って遊んで、お昼が終わるころに戻ってきてというような感じで小学校時代を過ごしました。中学校に入ってから、やはり同じような感じで、みんなの中には溶け込むことはできませんでした。親は一生懸命6人の子供を育てていましたので、私は、田植えだ、稲刈りだといったは学校を休んでは手伝いに出ていました。そのため学校にはあまり行きませんでした。

中学校を卒業した後、北海道にいとアイヌ、アイヌって、何かばかにされているような感じで、嫌だなという気持ちをずっと持っていました。17歳の頃、東京で働き口を世話してくれる人がいたので、東京に出ることにしました。夜行列車に乗ってきたのですが、その汽車に偶然乗り合わせた男性と一言、二言話をするようになり、その後、その人をずっとおつき合いをして、19歳の時にその人と結婚することになりました。その後は、アイヌとは全然関係なく、「アイヌ」という文字を新聞で見ても目をつぶって知らんぷりをして、「ちょっとあなたは日本人離れしているね」と周りの人に言われても、「ああ、そう？知らないわ」と感じて、「どこの出身？」と聞かれても、「北海道」と答えたらとアイヌを分かってしまうのではないかと思い「沖縄」とか「九州」というように答えたりしてずっと避けてきました。そんな私が、今ここで、このように皆さんに先祖のこととか母のこととかアイヌのことをお話するとは全く思ってもいませんでした。

それがある出来事をきっかけに、アイヌの刺繍やアイヌ語を勉強するようになりました。もう亡くなられたのですが、母の友人で浦河の野深出身の居壁りセ子さんという人が東京に住んでいました。その方が平成13年に「恵子さん、千葉に行って、アイヌの料理、おいしいもの作ったりいろいろやるから見においでよ」と声をかけてくれたのです。あまり気は進まなかったのですが、それまでも何回か誘いを断っていたので、何か断るのも悪いと思い、佐倉の方にアイヌ料理を作るのを見に行きました。そうしたら、いろいろなウタリの人がたくさん集まっていて、何かほんわかと温かい、それまでとは違った感じを受けたのです。その時、アイヌ文化交流センターで刺繍を教えてくれるから、今度おいでと言われて、「はい」と言って、交流センターで着物のつくり方を習

いはじめたのです。長い間知らないふりをしていたアイヌと関わるようになったのはそれからです。

それでもまだ、まともに本を開いたり、アイヌと書いたものを見るのは好きではなく、阿寒湖にお嫁さんに行ってアイヌ料理の店を継いでいる2番目のみどりとか、ムックリを弾いたり、歌を歌ったり、踊りを踊ったりしている3番目の悦子という2人の妹が母の後を継いでやっているから、私には関係ないと思っていました。

そして平成14年になって、今度はアイヌ語を習い始めました。そうすると「北海道で弁論大会があるから出てみないか、交通費も出してもらえるから、いいんじゃない？」と言われ、ああ、それならいいね、行きたいねということで、アイヌ語を習いはじめたばかりなのに、ただ北海道へ行きたい一心で弁論大会に出ることにしました。その時母は、それなら浦川タレフチというアツシ織りとか、いろいろなものを伝承したおばあさんの語った「浦川タレフチのスズメの物語」というカムイユーカラがあるから、そのカムイユーカラを語れと言うので、私はその資料を送ってもらい、2ヶ月間くらいかけて一生懸命覚えて、応募の締め切りに間に合わせて弁論大会でそのカムイユーカラを語りました。それからアイヌ語のおもしろさが分かったのです。

このカムイユーカラというのは、神様が自分のことを人間のようにして、サケヘという繰り返しの言葉を入れて語っていく物語です。このスズメの物語は「ハンチキキ ハンチキキ」というサケヘを入れながら物語を語っていきます。スズメは人間のつくる田んぼのお米をついばんだりして人間に関わってきますが、そのスズメがお祭をしたのですが、お祭にカケスを招待することを忘れてしまいました。カケスは招待されなかった悔しい思いを、お祭をしている仲間たちにぶつけて、けんかをさせるという物語です。私はこの物語で思いというものの力が強いということを学びました。

この物語を発表する機会が弁論大会以来なかったので、ここで、発表させてもらいたいと思います。聞いてください。

(「浦河タレフチのスズメの物語」を発表する)

浦河タレフチのカムイユーカラでした。(拍手)

何年もやっていないで、2、3日前に本を見ながら練習をして、あっ、できるって思ったけれども、やっぱりちょっとつかえてしまいました。私はこのカムイユーカラに惹かれ、それからアイヌ語も、どんどん耳に入って覚えられるようになりました。

それでは、今日の題名の「イフンケ」、子守歌という意味なのですが、母にもらった心の子守歌、これは母が「ねんねんころりよ」と子守歌を歌ってくれたということではなくて、いろいろな昔からの言い伝えとか、アイヌの大事な心、動物でも虫でも何でも大事にしなさ

いという心をいつも教えてくれたことが、私の子守歌になっているのだというお話しです。それと母に聞いた、浦河ではウチャシクマと言われる、言い伝え、短いお話のことです。

ウチャシクマの一つを紹介します。あるところに、お兄さんと弟の兄弟がいて、「お前たち、どこか働きに行つてこい」と親に言われて、2人して働きに出かけたのだそうです。おにぎりか何か弁当を持たされて出かけていったのだけれども、お兄さんは、気がついたら、いつの間にかいなくなってしまう。弟の方がさらに歩いていって、かがんで一休みをした時に、ふっと下を見たら、アリがいっぱい列をつくって、ぞろぞろ歩いていくのが見えて、ああ、アリも一生懸命こうして働いているのだなと思い、自分が今食べているものをぼろぼろと、御飯粒が何かを落としてやったら、みんな大喜びして、それを背負って巣穴へ運んで行った。その後もずっと歩いて行って、和人の家でやっと仕事が見つかったのだけれども、この米とヒエがいっぱい混ざった大きな袋の中身を、今日中により分けなければ、給金も何もやらないと言われ、うわぁ、困ったなと思ったけれど、やらなければならないと思い、一生懸命、そのヒエと米とをより分けていったのだけれど、夜中になっても終わらなくて、ついつい居眠りしてしまった。気がついてみたら、もう夜が明けていて、うわぁ、大変だぁ、早く終わらせなければと思って袋の中を見たところ、何と、きれいに米とヒエがきれいにより分けられていたのです。どうしたもんだらうと思って見たら、前に御飯をあげたアリたちが、米とヒエをより分けて恩返しをしてくれたということなのです。だから、何でもすぐに踏みつぶしてしまったりしないで、同じように一生懸命働いて生きているのだから、自分の食べるものでも、少しでもみんなで分け与えて食べるものだよということを教えてもらったお話です。

後、どうしても皆さんに聞いていただきたいのは、ばばから母に伝えられて、母がよく歌って聞かせてくれた「ヤイサマ」と言う、苦しい時とか悲しい時などに、その場でつくる即興の歌、その時々のお気持ちをあらわした歌です。よくばばが歌っていたとか、姉茶に昔からこういうヤイサマがあったということ、田んぼの手伝いや畑仕事をしながら、折に触れて母が歌ってくれた歌です。この歌も発表させてもらいたいと思います。

(「母親のヤイサマ」歌う)

何か悲しいこととか、そういうことがあると、情けなさそうにして、一生懸命歌っていたということを話して聞かせてくれました。

話が前後するのですが、ラマ、魂とか思いのことで、母から教わった大事なことがあります。思いは伝わるとい話です。両親が結婚する時、父が遠山家に婿に入ったのですが、父とばばやじっちゃんの意見が合わない時

など、父は婿だということで肩身の狭い思いをしていたようです。そうしているうち、とうとう口げんかをして父は家を出てしまい、何ヶ月も帰らなかったそうです。そこで、小さい子供もいるし、農家もやっていて大変だから違う旦那さんを貰わなければならない話が持ち上がったそうです。その時、私が2歳くらいなのですが、急に熱を出して具合が悪くなって、あっちこっちの病院へ連れて行っても原因が分からず、お医者さんは何でもないと云うばかりで、どんな手当をしても、だんだん物も食べなくなり、痩せて、赤いぷつぷつが出たりして症状がひどくなったそうです。そこで、ばばは神おろしをする人のところへ行って見てもらったそうです。すると、この子は父親に会いたがっている。そして、この子の父親もまた子供に会いたいという一心でいる。その思いがかぶさっているから、具合が良くなれないんだ、このままだと死んでしまう。この子を助けたかったら父親に会わせなさいというお告げが出たのだそうです。それから急いで母は、父の居るところを調べて、私を背負って探しに行ったそうです。そして、父の居るはずの村に着いて、どの家が誰かに聞いて探そうと思っていたら、息を吹きつけて曇った窓ガラスに遠山長吉、サキ、恵子と書いてあるのが目に入ったそうです。それで、その家に行って対面したら、私はきゃっきゃって元気になったそうです。その後、父を説得して帰ってもらうことになったそうです。アイヌラマというものがあって、その魂、思いを強くする、ケウトゥムとも言いますが、思いはお互いに通じるものだということを語ってくれたことがあります。

皆さんは信じられないかも知れませんが、うちのばばと母はそういう神様を信じています。もう一つ、こういう話もあります。ばばとじっちゃんには朝三郎という一人息子がいたのですが、戦争に行つて帰ってきた後、具合が悪くなって亡くなってしまったそうです。ばばは余りに悲しくて、息子に会いたいと思い、神おろしをする人のところへ行って神おろしをしたそうです。そうしたら「大丈夫だ、俺は印を持って生まれ変わるから」と言ったそうです。そして私は昭和23年に生まれたのですけれど、その印の場所にほくろを付けて生まれたそうです。だから、本当に神様はいるのだと思います。

じっちゃんの桐本安蔵が馬喰をして、馬の売り買いをしていた時の話です。私もよく馬に乗せてもらって歩いたのですが、その時、じっちゃんが歌ってくれたヤイサマがあるので、それも歌ってみたいと思います。

(「馬喰のヤイサマ」歌う)

というような感じです。(拍手)

じっちゃんが馬喰をやっていた時は、時々馬に乗りながらこういう歌を聞かせてもらいました。私が小学生の頃は、年中、家に馬がいたので、馬に乗りたくなったら、

その馬が草を食べている時とか、大好きなニンジン馬の足元に置いて首を下げた時に、首にまたがるのです。そうすると、馬は急に乘られてびっくりして頭をひゅんと上げるのですが、その時、ずっと馬の首から背中へ滑り降りるようにして乗るのです。そういうふうにして馬に乗って遊んだものです。そんなおてんばをしたり、兄妹たちと一緒に、春はブクサ、ギョウジャニンニクのことですが、ブクサを採りに歩いたり、その後は、パッカーイと言うフキノトウやヤチブキというものを採りに行きました。山に入って山菜を採る時には、まず、神様にお祈りして、食べる分だけを少しいただきますよと神様にご挨拶をしてから採っていました。夏には、野イチゴをとりに行ったり、ストーブにくべる薪を拾いに河原へ行ったりしていました。秋は、舞茸とか松茸とかボリボリというキノコ採りです。キノコを採りに行って、舞茸が採れた時は、手をたたいて歌を「キノコ カールシ カールシ カールシ カールシ ピリカ カールシ」と歌いながら、飛び跳ねて、ひとしきり踊って、山に感謝して、食べ物に感謝して帰ってきたものです。

私の過ごしてきた頃のことをイフンケ、母からももらったイフンケ、心の子守歌として今にきています。話の切りの良いところでお話を終えたいと思います。

ありがとうございました。(拍手)

〔質問〕 ご記憶の中で、お母さんから、幾つぐらいまでそういう歌を教えてもらいましたか。

〔弓野〕 歌は、私が、小学生の高学年か中学生ぐらいの時から、稲刈りとか田植えなど、母のそばで仕事を手伝うとき、仕事はつらいのですけれども、母から、そういういろいろな昔の話を聞いたり、歌を聞くのが楽しくて、学校を休んでも、べったりくっついて手伝いをしていました。

〔質問〕 というと、10代以降でそんなに小さい頃ではないですね。

〔弓野〕 そんなに小さい頃ではないですね。小さい頃は、ばばと一緒にいて、ばばにかわいがられていました。ばばはシヌイエをして入れ墨をしていたくらいなので、アイヌ語も時々話していました。そしてユーカラのような物語、イソイタクと言うのですが、昔話を、よく友達を呼んで私の耳元で言ってくれました。それが耳のずっと奥底に残っていて、自分がカムイユーカラを言うようになって、イントネーションとかそういうものがだんだん蘇ってきて、楽しくなったのです。

〔質問〕 そのユーカラも思い出されますか。

〔弓野〕 いえ、はっきりとは思い出せませんが、あらずみみたいなものは、ところどころ覚えています。しかし、家の手伝いをしている時に、アイヌの歌を聞いたり話を聞いたりするのは好き

だったのですが、自分が覚えてそれをやるのは嫌だと感じていました。母が辛い思いをしたことを聞いているせいか、それがトラウマのようになって、アイヌのことには関わりたくないと思っていたのです。

〔質問〕 失礼ですけれども、お子さんはいらっしゃいますか。

〔弓野〕 はい、2人子供がいます。

〔質問〕 そのお子様に、ユーカラを教えたことはありますか。

〔弓野〕 3、4年前から、娘と一緒に着物を着て踊りに参加したりしています。娘は何の抵抗もなくやっているようです。ただ、今は結婚して沼津へ引っ越したので、あまりこちらへは帰ってこられないのですが、刺しゅうも好きなようなので、これからだんだんと伝えていきたいと思っています。今でも、みんなが集まると、いろいろな歌を歌ったり踊ったり、ウコウクといって輪唱のように歌ったりしています。

〔事務局〕 時間となりましたので、これで本日のセミナーは終了したいと思います。どうもありがとうございました。

〔弓野〕 どうもありがとうございました。(拍手)